

指導資料

音楽 第28号

鹿児島県総合教育センター

- 中学校対象 -
平成13年9月発行

情意面の育成を大切にした音楽科の学習指導 - 歌唱指導を通して -

ドアを開けると、伸びやかで美しいハーモニーが耳に飛び込んできた。ステージで、目をきらきらと輝かせ、歌うことの楽しさを心から味わいながら演奏している生徒たち。ある夏の日、県文化センターで行われた中学校音楽コンクール「夏の祭典」の一場面である。

新中学校学習指導要領は、音や音楽への興味・関心や音楽を愛好する心情といった情意面の育成を、これまで以上に重視するとともに、基礎・基本の確実な定着を図ることを強調している。各学校では、情意面の育成を大切にした指導に心掛け、知識や技能面の育成とバランスのとれた指導法を工夫することが求められている。

そこで、ここでは、情意面の育成を大切にした音楽科の学習指導の在り方について、歌唱指導に焦点を当てて述べていく。

1 情意面が育成される過程

美しい音楽に出会うと、生徒は「きれいな曲だ。」「美しいハーモニーだ。」などと感じ、「自分も歌いたい。」「歌えるようになりたい。」という気持ちをもつ。

次に、生徒一人一人の個性や興味・関心

を生かした多様な音楽活動を展開することにより、生徒は楽しく音楽とかがわっていく。そして、これまでの学習経験を生かし、身に付けている能力を駆使して主体的に表現活動に取り組んでいく。

その結果、工夫してつくり上げた表現に満足できれば、生徒は感動とともに成就感を味わうことができる。

このような経験を積み重ねることにより、基礎・基本が身に付くとともに、生徒の音楽に対する感性は一層高まり、音や音楽への興味・関心や音楽を愛好する心情といった情意面がはぐくまれていくと考えられる。

以上述べたような学習を通じた情意面の育成過程を構造図に表すと、次のようになる。

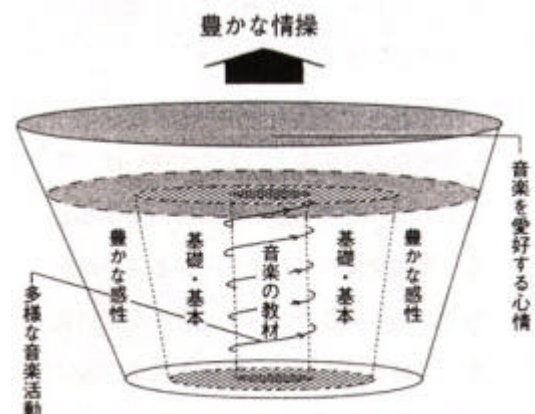


図1 情意面の育成過程

2 情意面を育成する歌唱指導のポイント

歌唱指導は、ともすれば、その目標を技能面の習得だけに焦点を絞った指導になりがちであるが、情意面を育成するためには次のような点に配慮した指導に心掛けることが大切である。

- (1) 楽曲に対する生徒一人一人の感じ方や思いを大切にしたい指導をする。

歌唱指導では、歌うことを通して音楽の味わいや表現の豊かさ、すなわち、音楽表現の意味を理解させることが重要である。

したがって、指導に当たっては、範唱を聴いて生徒一人一人がどのように感じどのように表現したいという思いをもっているかなどを把握して、表現活動に生かしていけるような指導に心掛ける必要がある。

例えば、曲を聴いて「明るく弾むような感じ」とか「さわやかですがすがしい感じ」などと、生徒一人一人が曲に対して感じたことを基に、「このフレーズはこのように歌いたい。」といった思いをもって表現を工夫できるように指導していくことである。

- (2) 歌詞を生かした表現を工夫させる。

歌唱曲の器楽曲との大きな違いは、歌詞があることである。歌詞は、旋律とともに楽曲全体のもつイメージと深いかわりがある。したがって、豊かな歌唱表現に高めるためには、歌詞の表す内容について話し合ったり、歌詞を構成する言葉から受ける感じを考えたりして、それ

を表現に生かしていくような指導の仕方を工夫することが大切である。

例えば、江間章子作詞、中田喜直作曲の「夏の思い出」では、水芭蕉が咲く美しい尾瀬の情景を想像したり、「はるかな尾瀬 遠い空」という言葉から作者の気持ちを考えたりする活動を設定することで、歌詞を味わって情感たっぷりに歌わせることができる。



写真 気持ちを込めて

- (3) 音楽的な感動体験の場を設定する。

生徒たちは、曲に対する自分の気持ちを生かして表現を練り合い、満足できる表現が出来上がったとき、深い感動を味わうことができる。特に合唱では、曲への気持ちだけでなく、各パートのバランスや統一性、ハーモニー、豊かな曲想表現などが求められる。心が一つになったときにすばらしい合唱が生まれ、音楽的な美しさとともに成就感や友達との一体感を味わうことができる。このような感動体験を数多く経験することにより、生徒たちの音楽を愛好する心情は一層高まっていく。

例えば、授業の終末段階でグループごとの発表会を行ったり、全員で合唱して録音した演奏を鑑賞したりするなど、音楽的な

感動体験ができるようにすることが大切である。

(4) より確かな表現を目指した指導をする。

生徒たちがそれぞれの楽曲に対する思いを表現に生かそうと、主体的、創造的に活動していけるようにすることはとても重要なことである。しかし、その活動にはどうしても技能的な面で限界がある。そこで、歌うことの楽しさを味わわせながらも基礎・基本の徹底を図り、より確かな表現ができるようにするための指導が必要になる。

例えば正しい発声で歌えるようにするためには、姿勢、呼吸法、共鳴のさせ方などについて具体的な指導が必要になる。これらの技能は、生徒だけで習得することは容易ではなく、教師が適切に教えていく必要がある。また、曲想表現についても、生徒の思いを生かした表現を大切にしながらも教師自身の思いも生かし、生徒と異なる視点からの表現を提案するとにより、より豊かな表現に気付かせることができる。

(5) 思いを表現しやすい歌唱教材を選択する

歌唱教材の選択に当たっては、生徒が楽曲と出会って、感じたことや考えたこと、思い描いた曲のイメージなどを具体的な表現に生かしやすい楽曲を選択することが大切である。具体的には次のような楽曲が効果的である。

ア 生徒の実態に即し、題材の目標の達成に適切な楽曲

イ 生徒が興味や関心をもち、表現への意欲がわく楽曲

ウ 生徒が主体的に学習に取り組む中で、互いに認め合い、励まし合い、学び合え

るように、表現と鑑賞が一体となった活動が可能な楽曲

エ リズムや旋律、和声が平易で、かつ感動的な楽曲

オ 旋律やハーモニーが美しく、詩情豊かな楽曲

3 情意面の育成を大切にした歌唱指導の実際

(1) 情意面の育成の視点からの教材分析

歌唱指導に当たっては、楽曲を構成する音楽的な要素を基に、事前に楽曲のもつ価値を分析するとともに、教師自身が目指す表現のイメージをしっかりと思い描いておく必要がある。そして、豊かな表現につながる要素について、次に示すような楽譜への書き込みをしておくこと、指導に生かしやすい。

朝の風に 安西 薫 作詞
長谷部匡俊 作曲

1あ) の かせに つば ②を あすけ ③い を の ④る とり ちち
2あ) の かせに ⑤こころを あすけ ⑥ら を の ⑦る とり ちち

予指をふたに 朝の風) が-ジをたててる 集音音

あ) の かせに ⑧ら い を の せで はる か かなたへとほう
あ) の かせに ⑨は い を たくし はる か かなたへとほう

お(い)同音を帯てくる 叫び出す様に

主観的を帯て歌う 光輝)が-ジをたててる 3拍子叫び

いま 大抵に ⑩かりは ⑪ら にあ) れて
いま 大抵に ⑫の-は ⑬ら にあ) れて

VVL ⑭ら にあ) れて ⑮ら にあ) れて

⑯ら にあ) れて ⑰ら にあ) れて

⑱ら にあ) れて ⑲ら にあ) れて

⑳ら にあ) れて ㉑ら にあ) れて

㉒ら にあ) れて ㉓ら にあ) れて

㉔ら にあ) れて ㉕ら にあ) れて

㉖ら にあ) れて ㉗ら にあ) れて

㉘ら にあ) れて ㉙ら にあ) れて

㉚ら にあ) れて ㉛ら にあ) れて

㉜ら にあ) れて ㉝ら にあ) れて

㉞ら にあ) れて ㉟ら にあ) れて

㊱ら にあ) れて ㊲ら にあ) れて

㊳ら にあ) れて ㊴ら にあ) れて

㊵ら にあ) れて ㊶ら にあ) れて

㊷ら にあ) れて ㊸ら にあ) れて

㊹ら にあ) れて ㊺ら にあ) れて

㊻ら にあ) れて ㊼ら にあ) れて

㊽ら にあ) れて ㊾ら にあ) れて

㊿ら にあ) れて

(2) 情意面の育成を大切にした歌唱指導の展開例（第1学年）

次に、生徒一人一人が自分の課題に沿って表現を追求したり、豊かな合唱にしていけるために互いに気付いたことや感じたことを生かしたりして、豊かな二部合唱をつくり上げていく学習の展開例を示す。

ア 題材名「合唱を楽しもう」

イ 本時の目標

曲想を生かして表現を工夫し、二部合唱ができる。

ウ 本時の実際（2/8）

過程	時間	主な学習活動	生徒の意識	形態	教師のかかわり *評価
感じる つかむ	10	1 「朝の風」を気持ちを含めて斉唱する。	・ 発音に気を付けて歌おう。 ・ 情景を想像して歌おう・	一斉	○ 歌う前に、前時で話し合った歌詞の表す情景や気持ちを想起するように助言する。 ○ 学習計画表を基に本時の課題を考えさせる。 ○ 特に自分が気を付けて練習したいことを個人課題として設定するように助言する。
見通す		2 本時の学習課題と学習の進め方について話し合う。 (1) 共通課題 曲に合った表現を工夫し、二部合唱をしよう (2) 個人課題 (3) 学習の進め方	・ 美しい合唱ができるようになりたい。 ・ 副次的な旋律をしっかりと覚えよう。 ・ 音程に気を付けよう。 ・ 二声の響きを味わいたい。 ・ どんな方法で練習しようかな。 ・ 自分のパートを楽器で音程を確認しながら練習しよう。		○ 追求方法が分からない生徒には、その生徒に適した方法を紹介する。
追求する		3 自分のパートを練習する。	・ 「朝の思い」の音程がうまくとれない。 ・ 高い音が出にくい。 ・ 友達に教えてもらおう。	個	○ 生徒一人一人の取組を観察し、助言や賞賛の言葉を掛けたり、一緒に歌ったりする。
繰り返す	25	4 パートごとのグループで練習する。	・ こんなふうには歌えばいいんだな。 ・ だいぶ声がそろってきた。 ・ 他のパートと合わせたい。	グループ	○ 各パートを2グループずつに分け、リーダーが練習の進行をするように指示する。 ○ 気付いたことを話し合っって練習を進めるよう助言する。 ○ 他のグループの声が気になる場合、第二音楽室を使うよう助言する。
		5 グループで二部合唱をする。	・ つられないようにしよう。 ・ 主旋律が移動するところがおもしろい。 ・ 男声が強すぎる。		* 曲想を生かした表現を工夫して歌っている。(活動の様子)
高める	10	6 全体で二部合唱をし、気付いたことを話し合う。	・ パート間の声量のバランスを工夫したい。 ・ もっとさわやかな感じが出るように歌いたい。 ・ 3・4段目をもっと盛り上げたい。	一斉	○ 音程が不安定な場合は、再度グループで練習するように助言する。 ○ 言葉のイメージを大切に歌うよう助言する。 ○ 部分的に教師が範唱し、より豊かな表現方法に気付かせる。
まとめる	5	7 まとめの演奏をし、本時の学習を振り返る。	・ つられないで歌えた。 ・ きれいな二部合唱ができた。 ・ もっと練習して上手になりたい。		○ 学習カードによる自己評価後、特に意欲的に取り組んでいた生徒を紹介し、賞賛する。

音楽を好きな生徒に育てることは、指導する教師の重要な責務である。音楽のすばらしさを実感させるには、教師自身が日ごろから豊かな音楽に触れて、音や音楽に対する感性を磨くように努めることが大切である。

音楽室は生徒にとって最も身近なステージ

である。そのステージで、目をきらきらと輝かせ、素敵な笑顔で自分を表現できる生徒の姿を目指したいものである。

【参考文献】文部省『中学校学習指導要領解説・音楽編』平成11年 教育芸術社

(第三研修室)

